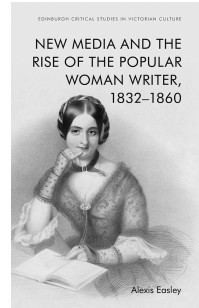


書 評

Alexis Easley, *New Media and the Rise of the Popular Woman Writer, 1832-1860*
(Edinburgh University Press, 2022)

田村 真奈美 (日本大学)



本書はタイトルのとおり、ヴィクトリア朝前・中期に登場した家庭向けの安価な新聞・雑誌と、そこで活躍した女性作家についての研究書であるが、扱われる女性作家の多くは詩人である。なぜ詩人なのか。それはこの時代の新しいメディアと大いに関係があるからなのだが、女性詩人を研究対象としていなくとも、この時代の出版文化に関心がある読者であれば、本書を興味深く読めるであろう。

著者 Alexis Easley は 19 世紀英国の定期刊行物と女性作家について、すでに単著 1 冊と多くの論文を発表している研究者である。この時代の定期刊行物の研究はデジタル・アーカイブが徐々に充実してきている現在、大変な進歩を遂げ、これまで知られていなかった事実が次々と明らかにされており、それはこの時代の文学界の見え方を変えるほどのものであるようだ（それでもデジタルでアクセスできない資料の方が圧倒的に多いそうだが）。Easley は ‘mobile textuality’ をテーマに、‘static textual objects’ を見ていただけではわからない世界の一端を見せてくれる。それでは序章から順に本書の内容を概観していきたい。

序章では、19 世紀前半には詩が大変人気のあるジャンルであり、それにはその短さも影響していたということが、時代背景とともに説明される。印刷物に課されていた税が徐々に軽減されたことで、1830、40 年代には安価な週刊新聞や週刊誌が数多く創刊されたが、掲載原稿を全てオリジナルとするものは少なく、多くは他の刊行物にすでに掲載されたものを転載していた。新聞・雑誌記事の著作権は、書物に比べて、厳格には守られていなかったのである。その際には短い記事、特に詩が転載されやすかった。

詩を読むのも書くのも女性が多く、安価な家庭向けの定期刊行物が増えたことで、女性詩人に作品を発表する機会、多くの人に詩を読んでもらえる機会が増えたのである。この新しいメディアである家庭向けの安価な雑誌・新聞と女性作家の関係を、数人の女性作家をケーススタディとして取り上げ、デジタル・アーカイブの研究を駆使して明らかにしていくのが本研究書である。

第1章はFelicia Hemans (1793-1835) を取り上げている。Hemansは詩集の出版によって、また詩が豪華本のアンニアルや高級文芸誌に取り上げられることによって、詩人としての地位を確立したが、誰もが知る詩人となったのは彼女の詩が大衆的な新聞・雑誌に再掲され続けたからだという。Easleyはもともとアンニアルに収められていたHemansの詩1篇を例に取り、この詩が次第に安価な家庭向け定期刊行物にも転載されるようになっていく過程を明らかにする。販売部数の多い安価な新聞・雑誌に掲載されることで、読者はロウワー・ミドル・クラスやワーキング・クラスにまで広がっていった。アンニアルに掲載されたHemansの肖像画も拡散し、セレブリティとしてのイメージの確立に寄与する。しかし他方では、コンテキストから切り離されて拡散していく自らの作品や肖像画をHemans自身がコントロールすることは難しく、転載からは報酬も得られないという問題もあった。それは彼女に続く女性詩人たちをも悩ませることになる。

第2章は新たなメディアに積極的に参画し、その中で地歩を築いていった作家Eliza Cook (1812-89) を取り上げている。Cookはワーキング・クラス出身で、言動も外見も19世紀の女性の規範に収まらない破格の作家であった。当時最も売れていた日曜新聞の一つ*Weekly Dispatch*に詩が掲載されるようになると「ワーキング・クラス出身の国民的女性詩人」として注目を集めるようになる。そして、掲載された詩は瞬く間に他紙へ転載され、さらにアメリカやアイルランドでも転載が続いた。*Weekly Dispatch*が定期購読者にCookの肖像画を配布したほどの人気であったが、この肖像画でCookは男性のような衣装を身につけていた。女性詩人像の「偶像破壊」ともいえるような肖像画の配布には批判もあったが、新聞とCook自身の宣伝にはなったようだ。その後Cookはこの新聞の副編集者になり、ついには自分の名を冠した雑誌*Eliza Cook's Journal*を創刊し、成功を収める。

Cookのジェンダー規範からの逸脱は一般読者を遠ざけるどころか、彼女のアピールの重要な一部だったことが興味深い。晩年には社会の保守化により活躍の場が狭まったが、安価な家庭向け定期行物の黎明期に、その機に乗じて文筆の世界に一気に乗り出していった姿は多くの作家志望の女性を勇気づけたことであろう。

第3章は本書の中ではやや異色な章で、正典作家であり、主に小説家として知られるGeorge EliotとBrontë姉妹を扱っている。彼女らにはキャリアの初期に詩を発表しているという共通点がある。Eliotは1840年に‘M. A. E.’という署名で*Christian Observer*に初めて詩を発表しているが、そこへ至る過程が彼女の残したノートに見られる。このノートには詩が20篇以上書かれているが、これまで批評家にまともに扱われてこなかったという。これらの詩の多くは、実は詩集や定期行物から書き写されたもので、Easleyはその出典を調べてEliotが少女期に何を読んでいたかを明らかにし、またEliotがそれらのテキストに加えた変更や修正を分析して、書き写すという作業を創造的な作業に変えていったと論ずる。定期行物や詩集、アンニアルから詩を集めて書き写し「スクラップ・ブック」を作る作業は19世紀半ばに流行したが、その意義は本書の最終章でさらに詳細に論じられる。他方、Brontë姉妹が最初に出版したのは詩集であり、しかもその詩集は2冊しか売れなかった。多くの読者にとって詩が新聞・雑誌で読めるものになっていた1840年代に、詩集を出版するのはリスクが大きかったのである。『ジェイン・エア』の成功後に出た第2版も売れ行きはよくなかった。しかし、彼女らの詩も定期行物に掲載・転載されて実は多くの読者に届いていたとEasleyは言う。彼女はデジタル・アーカイブを駆使して、姉妹の詩がばらばらに、アイルランドを含む英国内の新聞・雑誌に次々と転載されていったことを明らかにする。この部分には個人的に大変衝撃を受けた。まさに‘static textual objects’だけを見てはわからないことがあると実感した章であった。

第4章は*Chambers's Edinburgh Journal*を舞台に女性作家の活躍の実態を明らかにしている。1832年創刊の*Chambers's*はミドル・クラスを対象とした家庭向け週刊新聞で、最新の印刷技術、低価格、販売部数の多さを誇った。また、オリジナルの記事・作品を掲載していることが特徴であった。

Easleyが調査したW & R Chambers アーカイブには、紙面のデータのみならず、編集者と寄稿者のやり取りがわかる書簡データや元帳も残っており、誰が何をいつ寄稿して原稿料はいくらだったのかというところまでわかる。多くの女性作家(著名作家も含む)が本人の希望により匿名で寄稿していたこと、詩は散文よりも報酬が少なかったこと、そして個別作家についての分析結果が興味深い。*Chambers's*の狙った読者層が「現代的な」女性であり、女性読者と女性作者の関係が近かったことで多くの女性作家が活躍の場をそこに求めたという。この章では詩人だけでなく小説家も扱われており、活気ある出版界の様子が垣間見える。

第5章ではアイルランド出身の詩人Frances Brown (1816-79)が取り上げられる。彼女もEliza Cookと同様、ワーキング・クラスの出身で、しかも目が不自由であった。文筆で自活する必要があったBrownも、発表した詩が多くての定期刊行物に転載され、また彼女のライフストーリーも拡散して、‘Blind Poetess of Ulster’としてセレブリティ詩人の地位を確保した。しかし、転載では報酬がない。いくら著名になろうとも経済的には楽にならない女性作家の奮闘がこの章では描かれる。

第6章はスクラップ・ブック文化に焦点をあて、女性が新たなメディアの単なる消費者ではなく、創造的な読者としてこの時代の大衆印刷文化に参加していたことを明らかにする。スクラップ・ブックといっても印刷物を切り取って貼り付けるタイプだけでなく、自分で書き写し、時には変更を加え、挿絵(これも多くは印刷物からの転写)を入れたり、ページ上の配置を工夫したりなどして手を加えた、大変に凝ったものもある。そして詩はスクラップの題材として人気があった。Easleyはスクラップ・ブックに集められた作品の出典をたどり、隣り合った作品同士が新たなコンテキストで意味を生み出すさま、またスクラップ・ブックの作者が自らの意図に合わせて作品や挿絵を探し、ページの上に展開していく作業を明らかにする。しかしながら、限られた数のスクラップ・ブックから当時の女性読者が何をどんなふうにしたかの傾向を探るのは難しい。Easleyは今後のさらなる資料の充実と研究の進展に期待を寄せて、この章を締め括る。

最後にCodaと題された章が置かれて全体をまとめているが、デジタル・アーカイブを使ってヴィクトリア朝前・中期の「忘れられた」女性作家を発

見する作業は、意図した努力と同じくらい偶然の果たす役割が大きいということが、実例をとおして描かれる。もちろんデジタルでなくとも研究調査に偶然はつきものであろうが、本研究の背後にあるリサーチの様子が見えて興味深い。

全体を通して、著者による膨大な資料の調査とテキストの精緻な分析には感嘆するほかない。資料はさらに調査する余地があり、今後も研究を発展させることが可能性であるという。多数挿入された図版も本論と関係が深いものが多く、理解を助けてくれるうえ、単純に見ているだけでもおもしろい。最終章のスクラップ・ブックの実物の写真は拡大して詳細に見たくなるほどである。

各章は、もとは個別の論文としてジャーナルに発表されていた。そのため、全体を通して読むと同じ情報が何度も繰り返し出てきたり、時代が前後したりすることがあり、その点がやや気になった。その反面、個々の章は独立性が高いので、関心のある章だけでも議論の流れはつかめる。今後もさらなる発展が期待できる分野の大変刺激的な研究書であった。